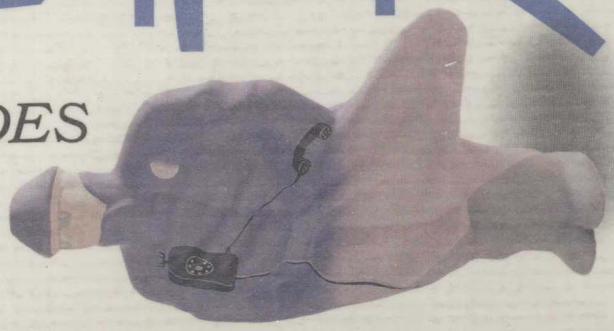
さよならメルセデス

Good-bye, MERCEDES

Yasushi Akimoto



秋本 康

さらば、メルセデス

秋元康

さらば、メルセデス

Good-bye, MERCEDES

著者――――秋元 康

発行――――1988年10月13日　第1刷
1988年10月19日　第2刷

定価――――1000円

発行者――――甘糟 章

発行所――――株式会社マガジンハウス

〒104-03 東京都中央区銀座3-13-10
電話―販売部書籍課03-545-7130/編集部03-545-7030

印刷――――凸版印刷株式会社

製本――――西村印刷製本株式会社

©by Yasushi Akimoto, 1988, Printed in Japan

落丁本、乱丁本は小社販売部書籍課宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-8387-0039-3 C0095 ¥1000E

僕は、あの頃から、何も変わっていない。

確かに、体重は十キロ以上増えたし、髪も薄くなってきた。

今の僕と較べると、当時の写真の中の僕は全体的にもっと、華奢でしなやかだ。

十五年の歳月が流れた分だけ、僕も年老いたのかもしれない。

だけど、〝老いる〟ということは、必ずしも、〝変わる〟ということではない。

移りゆく季節に合わせて、洋服を選ぶように、年号の下一ケタが増えていくたび、若さを着替えているだけだ。

その中身の僕は、好もうと、好まざろうと、あい変わらず、僕のままだ。

そんな自分に、少し、あきれながら、そして少し、ほっとしながら、僕はこの小説を書いた。

〝さらば、メルセデス〟

――――――――僕自身に捧ぐ

さらば、メルセデス　目次

Good-bye, MERCEDES — CONTENTS

一九七三年の冬
IN THE WINTER OF 1973 — page4

一九七七年の夏
IN THE SUMMER OF 1977 — page110

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一九八二年の春
IN THE SPRING OF 1982 — page162
一九八七年の秋
IN THE AUTUMN OF 1987 — page220
一九八八年の今
THE PRESENT : 1988 — page230
メルセデスのあとで
EPILOGUE — page236

一九七三年の冬

IN THE WINTER OF 1973

ラジオから、聞いたこともないような新人の曲が流れていた。
ちょっと、いい曲なので、耳を澄ましていると、拓郎が、荒井由実の『きっと言える』と紹介した。
そんなことは、どうだっていい。
僕は、もう2時間も、この放物線の接線を求める微分が解けないでいた。
分厚い『チャート式数学ⅡB』は、まだ、予定の3分の1も進んでいない。

「私は、こうやって、この大学に入った」という合格体験記を参考にして、3日もかけて念入りに作った壁の予定表が無意味なものに思えてくる。

その隣りで、林檎を股間に当てている麻田奈美の裸のポスターの方が、よほど受験勉強に貢献しそうだ。

開いたページのすき間に挟まった消しゴムのかすを鉛筆の先で穿っているだけで、夜が明けてしまう。

こんなことでは、東大はおろか、滑り止めの大学にだって、受かりはしない。

駿台予備校の公開模試も惨憺たるものだった。

だいたい、うちの高校が、私立C大の付属高校で、エスカレーター式に大学に進めるからいけないのだ。

司法試験の合格率が高い法学部をめざす生徒以外は、誰も勉強していなかった。

せいぜい、試験の前、申し訳程度に教科書を開くくらいだ。

当然、授業は単位を取るだけの、活気のないものになっている。

だから、僕は、学校の授業とは、全く別の受験勉強をしなければならない

のだ。
それに、教師は「実力さえあれば、外の大学を受験しても構わない」なんて言っているけど、一度、外の大学を受験したら、もう、うちの大学へは推薦してもらえないらしい。
それじゃあ、何のために、高い入学金を親に払わせたのか、わからない。
よその大学を受験して落ちても、とりあえず付属高校だから、ここの大学に入ることだけは確保して……という消極的な親孝行の目論見は、見事に外れた。
机の抽斗（ひきだし）の奥に隠しておいたハイライトに火をつける。
親父に見つかってから、ここ1週間禁煙していたせいで、大きく吸い込むと、頭がクラクラした。
石川や加藤に、「セブンスターやチェリーじゃ、煙草を吸った気がしねえよな」なんて言ってしまった手前、ずっと、ハイライトで通してきたけど、やっぱり、少し、強すぎる。
「タンベは、やっぱ、ショッポーに限るぜ」と、目を細めながらうまそうに吸っている金井田も、ジャズ喫茶に入りびたって、罐ピースをトレードマー

クのようにしている杉本も、本当は、みんな、無理しているのかもしれない。
明日からは〝峰〟にしよう。
あいつらには、ボックス型のパッケージが気に入ったからとでも言えばいい。
部屋が、ハイライトの煙りでいっぱいになった。
夜中に、親父やお袋が、離れのこの部屋まで来ることはないけど、また、見つかったら面倒だ。
石油ストーブで暖めた空気を逃がさないように、雨戸を5㎝ほど開けると、冷たく、ぴんと張りつめた冬の夜の外気が、針で風船を突いたように流れ込み、僕の顔に当たって、一瞬、息苦しかった。
空が昼間より、低く見える。
星のせいだろうか。
自分が吐く息の白さに反応するように、足元から、ジーンと冷えてくる。
短くなった煙草を投げ捨てようとして、やめた。
僕が、毎晩一服するたびに、その吸い殻をここから投げ捨てていたために、「お宅のその窓を中心に半径1m以内が、吸い殻の山なのよ」と、地区会のオ

リーブに似たおばさんにチクられたばかりだ。
カメラのフィルムが入っているグレーの小さな円筒型の容器に、まだ、火がついている吸い殻を入れて、パチンと蓋をした。
酸素がなくなれば、やがて、火は消える。
簡単な理屈だ。
親もまさか、フィルム入れが灰皿とは思わない。
このインスタント灰皿は、僕たちの仲間で流行(はや)っていて、誰の部屋に行っても、机の抽斗の中から、たいてい、2、3個出てきた。
雨戸を閉めても、しばらくは寒かった。
椅子に坐ると、自然に貧乏ゆすりをしてしまう。
部屋が暖まって、また、煙草の匂いがした。
朝まで匂いが残ってはまずいので、本棚に置いてあったキンチョールを、一吹きする。
煙草とキンチョールの匂いがケンカする部屋で、もう一度、気合いを入れて姿勢を正し、赤いラインマーカーで囲んだ《問10》を大きな声で読み上げた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

そして僕は、マラソンランナーのように、たったひとりで長い夜を再び、走り始めた。

ラジオからは、この時間に全く似合わない浅田美代子の『赤い風船』が流れていた。

一九七三年の冬

今朝も寝坊した。もう、7時40分だ。

ギリギリ、始業ベルと同時に、教室に駆け込むことができる7時45分のバスにも間に合いそうにない。

こうなると、もう、急ぐだけ損だ。

同じ〝遅刻〟ならば、1時限目が終わる頃に行った方がいい。

洗面所でもたもたしていると、台所から、水道の音に負けないようなお袋の声が聞こえた。

「朝、起きられないんだったら、夜遅くまで勉強するのはやめてちょうだい。

早く寝て早く起きて、勉強するのね」
僕は聞こえないふりをして、バイタリスで髪を整える。
どうも分け目が決まらなくて、ドライヤーを使って櫛を入れていると、トイレから新聞を広げた親父が出て来た。
毎朝、同じ時間にうんこが出るというのを自慢にしてるだけあって、今日もピタリ、7時50分に、排便作業が完了したらしい。
鏡の中の、逆さの親父と目が合う。
「そんな格好ばかり気にして、どうするんだ？
もっと、勉強しなきゃならんことがあるんじゃないのか？
基礎はどうなんだ？　基礎は？」
僕の横に割り込みながら、いきなり、小言を言い始めた。
〝基礎〟は親父の口ぐせで、僕は、もう16年間も、〝基礎作り〟をさせられている。
2年前に肝臓を患った親父は、大好きだった酒もやめて、神経質なほど、健康に気を遣うようになってしまった。
酔っ払って、いくつもの武勇伝を作った親父が、洗面所の脇で青竹を踏ん

でいるその背中は、なんだか、とても、小さく見える。

「もう、子供じゃないんだぜ」と言い返そうと思ったけど、テレビのホームドラマのようで嫌だし、第一、朝からもめたくないので「ハイ、ハイ」と明るくつぶやきながら、退散した。

さて、今日は何を着て行くか。

うちの高校は制服がなく、それぞれが思い思いの私服で通学するので、男子校の割には毎朝の洋服選びに結構、気を遣っていた。

一応、『男専』や『メンクラ』をめくりながら、真似をしてはみるのだけれど、グラビアの中のモデルのように、カッコよくなったためしがない。

僕は毎年、金井田を誘って、科学技術館で開かれるＶＡＮのバーゲンに出かけて、スウィングトップやら、コッパンやら、襟つきのトレーナーをまとめ買いしていたから、ファッション誌の表紙のようにめまぐるしく流行を取り入れるわけにはいかなかった。

その時にもらうＶＡＮの紙袋は人気が高くて、小脇に抱えて歩くのが、おしゃれだった。

あんまり長く持ち歩くので、底のあたりが破れ、ボロボロになってきても、

みんな、セロテープを貼って、また、使っていた。
クラスの大半はＩＶＹっぽい格好をしていたけれど、なかには、コンチやヨーロピアンで決めて、学校の帰りに『ビブロス』や『メビウス』で女の子をナンパしまくってる遊び人や、髪を伸ばして、汚ないジーンズに下駄履きでやって来るフォークソングかぶれもいた。
要するに、自分に何が一番似合うのかがわからなくて、無理に、それが正しいと思い込んだファッションをしていた。
結局、外が寒そうなので、ワークシャツにコーデュロイのパンツ、それに、ＣＰＯを羽織って行くことにする。
マジソンバッグに、ルーズリーフとシャープペンだけ突っ込んで出かけようとすると、「牛乳くらい飲んでいきなさい」と、また、お袋の声がした。
それにしても、親というのは、どうして何度も何度も同じことを言って飽きないのだろう。
親はいつまでも、変わらない親子関係を望んでいる。
ワークブーツのひもをほどかないで、つま先にひっかけたまま、家を出た。

8時2分のバスに乗ると、ドアの近くに金井田がいた。
同じ中学出身の金井田は、僕が乗る停留所のひとつ手前から通っている。
「遅いじゃん？」
満員のバスの中で、僕のために体ひとつ分、左にずれて、金井田が言った。
「拓郎、最後まで聞いちゃってさ」
僕は、まだ眠くて、あくびをしながら答えた。
受験勉強をしていることは、誰にも話していなかった。
ガリ勉のように思われるのが嫌だったし、付属高校でありながら、外の大学を受けようとしているのは、仲間を裏切っているようで抵抗があった。
「今日は乗ってねえな？」
あたりを見廻しながら、金井田が訊く。
「7時45分のバスだろ？」
「このバスの時もあるぜ」
「だって、〝MG〟の奴、1人も乗ってないじゃん」
僕たちの朝の話題は、いつも、このバスの沿線の女子校に通う女子高生だった。

MGという略称で呼ばれているその女子校は、中学から大学までの私立で、紺のツーピースに赤いネクタイが制服だった。

何度か出逢ったその女子高生は、南沙織を色白にしたようなタイプで、その長い髪と笑うとこぼれる八重歯が、僕と金井田を魅了していた。

「今度逢ったら、名前、訊いてみようぜ」

バスの振動に大きく傾きながら、金井田が言う。

学校に行けば、むさ苦しい男たちしかいない男子校の僕たちには、これも、ささやかな恋のチャンスなのだ。

「どっちの方?」

「どっちの方って?」

「いつも、いるだろう?

2人で……」

金井田が話しているのは、その南沙織のことだってわかっているのに、僕は、わざと訊いた。

人の言葉を素直にそのまま受け取る金井田は、僕の言葉に首をかしげながら、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com